

学園生活への提言



提言1

栄の花は開かずや

大西博 (旧13回生)

戦局が緊迫した私の高校時代のことである。

マントを纏って、下駄を履き、放歌高吟してのし歩いた。外出のときは靴を履きゲートル(脚絆)を着用し、規律を正すようにと先生は生徒を戒めるのだが、あの独特のスタイルは殆んど身体の一部になっていたので、おいそれとやめる訳にはいかなかった。安倍校長は「生徒の無邪気さのために悩まされること屢々であった」

と後に当時の苦衷を回顧されているが、そんな

学校は廃校にすべしという極論さえも起らないとはいえない社会情勢であった。その頃の校長の訓話の中に「もし吾が国の社会から本校の卒業生を全部引き上げさせたとしたならば、国力がかなり低下するであろう」という件りがあつたことを思い出す。これは国家有為の人材を輩出した立派な伝統ある学校なのだから、後輩も

しつかりせよということであつたと思う。安倍

先生のように胸を張って学校の実力と栄光を誇れることは教育者として冥利に尽きると思うが、先生の言はあれから50年たった現在も尚変らざる事実である。私の同期生さては同じ釜の飯を食った数人の親しい寮の仲間に限ってみても、各界に進出し、要路にあつて大きい役割を果している。要するに有能な傑出した先生方が全国

から俊秀を集めて存分の教育をすることにより、必ず有為の人材が養成されるといふ証左がここにある。その学校の栄光ある伝統といわれるものは、教官と生徒が一丸となつて自らの手で営業築き上げたものに外ならない。

いつまでも我が精神の故郷であると慕つて卒業した母校が、終戦後の教育改革によつて廃校となる破目になった。創立以来60年という短い歴史にとどまった。そして新制高校が誕生し、当初個性化や多様化を謳つたようであるが、その後の高校進学率の急激な上昇もあつて、画一化、平等化の方向へ押しやられてしまつた。また高校の卒業生の半数以上の人が大学や短大や専修学校などに進学する状況では多様化は起りにくく、勢い進学準備中心の教育が主流となる



う。

私の曾つて住んでいた鹿児島県の県立高校の話である。国立大学への進学熱が高く、父兄の強い要望もあつて、学校側も献身的な進学指導に努め、驚異的に高い合格率で実績を上げていた。毎日出される宿題をこなすだけで夜半に及び、進学塾などに行く必要もないし、行く時間もない。正に猛烈の一語に尽きた。親にとってはこんなありがたい高校はないだろう。

さて鹿児島には私立のラサール高校という東大に毎年百人以上の入学を送り込み、全国に名を馳せた進学教育のお手本のような高校がある。公立と同じことをやっていたのでは私学の存在理由はない。ラサール高校は正に進学教育を個性として売り出し、それで私学の社会的評価を高めたのである。進学準備教育にその学校の個性を強調する私学が増えていると聞く。

私の高校の同期に私立灘中学から来た人がいる。彼は灘中の10回生であるが、彼の話によると当時灘中から旧制一高への入学者は毎年一名あるかなししかであり、カーキ色の制服にゲートル姿で隊伍を組んで受験に来ていた県立神戸一中は毎年数十名の合格者を出していた。今でこそ全国屈指の進学校として名が高いが、当時の私立灘中学は田舎の二流校であつたという。入学試験の厳しい大学に沢山の合格者を出すことをアピールする以外にも、スポーツなどの課外活動で特色を打ち出すとか、海外の学校と

姉妹校提携をして国際化の波に乗るなどで個性化を狙つているところもあるが、何れにしてもそれなりの実績を挙げることが出来ればよいのである。これまでのように公立校に入れなかつた者の受け皿としての役目しか果し得ないといふのであれば、いつまでたつても社会の評価は低いだろうし、この点の転身と脱皮が急務であろう。

入つてよかつたと思う学校、誇りのもてるような学校、いつまでも心の故郷として慕える学校がよい学校であつて、本来偏差値や進学率の高さだけが問題ではない。私にとつて旧制一高がそのような学校であつたことは幸いであつた。先生方からは将来の日本を背負つて立つ人材を育てるのだという使命感と満足感が随所にひしひしと生徒側に伝つて来た。私の岩中時代は先生が教えるべき教科を大分積み残したために、入試で苦労したことはあつたが、それなりに楽しい学校であつた。学校を良くし、特色を出し、社会の評価を得るためには、教師が教えるべきことをしっかりと教えることが第一に重要である。また生徒はどんどん先生に質問することである。自分でよく勉強していない生徒は質問も出来ないのである。ここに先生と生徒の一体感と連帯感が生まれる。生徒はそこでこの学校に入つてよかつたとしみじみ思うだろう。

(鹿児島大学名誉教授
盛岡大学教授 農学博士)